

報告

## 電子音響音楽国際研究大会 EMS2018 報告 Report of EMS2018

水野 みか子  
Mikako MIZUNO  
名古屋市立大学  
Nagoya City University

### 概要

「電子音響音楽国際研究大会 EMS2018」は6月20日～23日の四日間にわたりフィレンツェのヴィラ・フィナリーで開催された。ヴィラ・フィナリーはソルボンヌ大学所有の建物である。今回の実行委員会であるフランスのチームが、イタリアの音楽家や音楽研究者との協力によって特色あるプログラムを打ち出した。発表件数は、昨年名古屋大会とほぼ同じであったが、日本を除くアジア諸国からの参加は少なかった。本発表では、いくつかの研究動向や会議運営の様態等を報告する。

EMS Network is an international initiative which aims to encourage the better understanding of electroacoustic music in terms of its genesis, its evolution, its current manifestations and its impact. JSSA and Nagoya City University hosted EMS2017 conference and this time, in 2018, the annual congress was held in Firenze, Italy. The venue, Villa Finaly is originally built in twelfth century. After hundreds of years the family Landau-Finaly entrusted the house to the University of Paris in 1953. More than sixty papers with two keynote speeches were presented in EMS2018.

### 1. 初めてのイタリアでの開催

EMS Network の2018年大会は、フィレンツェの中心街からバスで10分程度ボローニャ通りを上った地点にあるヴィラ・フィナリーで開催された。ヴィラ・フィナリーは12世紀までその由緒正しい来歴を遡ることができる。貴族の別荘として久しく使われていたが1953年にはソルボンヌ大学に委託され、学生の合宿や国際会議の場として使われているとのことだ。大きな門を抜けてハーブの庭と美しいレモンの木を楽しみながら、マグノリアが聳り立つ中庭を抜けていくと、samurai と名付けられたコケティッシュな彫刻が玄関へと導いてくれる。宿泊可能な部屋も用意されていて、

なかでもVIP用のゲストルームは一流ホテルのスイート並に広い。もちろん筆者は小部屋の方に宿泊させていただいた。イタリアでの開催ではあったが、基本的にパリの研究者たちを中心に運営されていたのであり、これまでもステアリング・メンバーとして会をリードしてきた Marc Battier, Leigh Landy, Daniel Teruggi の三人に加えて、現在ソルボンヌ大学所属の Pierre Couprie, Nicolas Marty, そしてパリ第八大学の Anne Sèdes がチームを組んで成功に導いた。

開催地からのゲスト二人による基調講演、予定されたペーパー64件、そしてコンサート1件がプログラムの全体である。水曜日から土曜日という四日間の会期中、金曜と土曜は二つのセッションが平行して進められた。初めの二日間はシングル・セッションである。コーヒータイムは午前中に1回、バンケット無し、昼食は各日受付に申し込むことによるランチボックスというラフなスタイルで進められ、ペーパー発表のキャンセルが各日1～2件あった。運営面では確かにアジアでの開催に比べてカジュアルなイメージだったが、日本人の発表が7件（石井紘美、井上さつき、小島有利子、藤井孝一、松並えりか、水野、安原雅之）も含まれていたことは画期的である。

2003年に始まったEMS大会の開催地は、これまでパリが2回のほか、モンテリオール、北京、レスター、ブエノスアイレス、上海、ニューヨーク、ストックホルム、リスボン、ベルリン、シェフィールド、名古屋となっており、多くはヨーロッパ内であるが、理想的には隔年で欧州以外での開催が期待されているようだ。次回はメキシコが候補になっていると聞いた。開催地や実行委員長の状況と判断に応じて、大会の形態やボリュームを柔軟に変えていくことができる点は、EMSの強みだと思われる。

## 2. 二つの基調講演とウェルカム・コンサート

Laura Zattra による基調講演「独創性とは、予測不能なプラグマティズムなのか？」は、19世紀イギリスの著述家ハーバート・ポールを引用しながら、独創性や実験精神、そして、この世で全く新しいものを人間が創造することへの疑念から出発して、ウンベルト・エーコの、「人間の知の歴史において確信の時代は無かったが、少なくとも、ひるむことなく捉え直すという崇高な試みはあった」という、それ自体再把握のようなテーゼへと導いていく。これはもちろん、EMS 2018のテーマが、「電子音響音楽はいまだ実験的音楽のひとつの形であるのか」という問題であったことに答える思弁である。シカゴ大学のトーマス・クーンやハーバード大学のブルーノ・ラトゥールらが、科学知に対して新しい発見をもたらすことを独創性として捉えていたことを受けて、Zattra は、方法やデータや理論に拘泥するところに独創性が現れるとすれば、サウンドアートにおいてどのような研究が前提とされているのか、と改めて問いをたて、芸術実践それ自体はいまだかつて実験的だったことがないことを確認する。IRCAM-CNRSにおける「音楽実践の分析」グループの研究者でもある Zattra の方法は、作曲家やデザイナーに対するインタビューによって作品アーカイブに関する価値観を打ち立てようとするものであり、作品分析を主眼とする音楽学の手法とは異なるので、電子音響音楽という特異な音楽形態に関する研究手法の問題提起としても興味深かった。

もう一つの基調講演として、ボローニャ大学で電子音響音楽を教えている作曲家 Lelio Camilleri が、音素材と音楽構想に関してどのような問題に直面し、自ら判断しているかを語った。ジョン・ケージが、「真の実験的音楽とは、結果が予測できないことである」と言う一方で「私の音楽は実験的なものではない、実験は作曲の前に既に行われている」と言表し、《一人の男のための交響曲》や《少年の歌》や《顔》といった20世紀後半の作品も「実験的」と呼ばれている状況が未だにあることに鑑みて、Camilleri は「実験的」という用語の定義は曖昧さを説き、電子音響音楽のこれまでの歴史の中で音素材と形式の間の新しい関係と電子音響音楽特有の語法が探求されてきたという意味において「探求」という言葉がふさわしいと主張する。録音した素材をサウンド・オブジェとして美的に同定し、内的・外的に組み立てていくという電子音響音楽の手法に関して、Camilleri は自らの創作経験もふまえながら、ドラマツルギー、アネクドート、ナラティヴィティを確率した事例を提示した。シェフェールがミュージック・コンクレートという用語を当ててから50周年の1998年と70周年の2018年を比較して、分析のツール環境の変化が作品のどの側面に迫っているのかに関して省察した点も興味深かった。

会議開催地域の音楽家によるウェルカム・コンサートは、初日の基調講演の後にセットされた。講演と同じ建物の別室でのコンサートだったので、移動の問題は無かった。コンサートを主催したのは、1987年にルチアーノ・ベリオが設立した *Tempo Reale* である。創設以来、ベリオ作品のリアライゼーションを主たる目的として、*Tempo Reale* は新しいサウンド技術と実験音楽のためのリサーチ、制作、教育に携わっている。今回のコンサートでは、Kilian Schwoon、Francesco Giomi、Lelio Camilleri、Simonluca Laitempergher、Francesco Casciaro によるライブ・エレクトロニクス・パフォーマンスやテープ作品が上演された。

## 3. 多様なアプローチと若手研究者の視点

個人発表は、美学、分析、理論、受容、教育、アジア電子音響音楽研究 (EMSAN) といった、これまでも議論が多かったトピックに加え、インターメディア、プリザーベーション、パーセプション、3D ディフジョン、ヴィジュアル・ミュージック、DIY、といった、より細分化された領域でのコンセプトと技術への広がりを見せた。

分析の対象としてルイジ・ノーノの作品をとりあげた発表が複数件あったことは、イタリアでの開催なので十分予想されていたことであるが、一つの作品を集約的に分析する発表は例年に比べて少なかった。「実験音楽」ないしは「実験的」であることが大会テーマであったために、特定作品における実験性が論証しにくいという理由も考えられるが、その反面、結果が予測不可能なことを「試してみる」ことを自らの創作の中で優先させる作曲家についての発表は、国、地域、時代などの点でバランスよく並んだという印象がある。

EMSANトラックでは、作家論の対象として三輪眞弘と佐近田展康がとりあげられた（この二人の作曲家は実験的だという前提で）が、その一方で、楽器論として、ヤマハの最初の電子オルガンやテルミン奏者竹内正実によって開発されたマトリョミンが紹介され、武満徹の A.I が現代の若者を被験者とした聴取アンケートとともに論じられた。

現代における「実験」精神とは、ガジェットであれ洗練された新作楽器であれ、とにかくモノやシステムを作ってみることであるとすると、Mauro Lanza と Andrea Valle の共同制作による、DIYのエコシステムでの作品シリーズ *Systema Naturae* が論じられた (Daniela Fantechi) ことは、三輪と佐近田 (フォルマント兄弟) のアコーディオン音楽を論じることと近似していると考えられるかもしれない。対象が近似するのであれば、分析方法を比較することもできるが、作ったモノがオブジェなのか楽器をめざすのかによって、実験性のレベルも異なってくるであろう。楽器ではなくサウンド

制御するハードウェアとして登場したテープ録再生機も、新しい音楽コンセプトに寄与したという意味では実験的な楽器であり (Jaime Oliver La Rosa)、こうした論点は NIME のコミュニティにも共通する。

MAX のグラフィカル・インターフェイスが音楽的文脈にどのように展開されていくかという問題提起 (Peter Falthin) は、プログラムやシステムの成り立ちに沿った音楽を一步進める教育論へとつながり、アニメーションの効果音 (Clovis MacEvoy) やアコースマティック音楽における「視聴覚」要素 (Massimo Vito Avantaggiato, Isabel Pires) に関する議論は、オーディオ・ヴィジュアルの相関関係の研究が、経験的叙述や単純なアンケート解析という揺籃期を終えたことを示唆する。

1950-60 年代の実験音楽が、その時代の「前衛」を体験しなかったカルチャーにおいてどのように受けとめられ変容するのか。これは受容史として音楽学的な注目を集める。Jean Penny + Andrew Blackburn によるマレーシアでの社会実践は新鮮な事例だった。

古典的作品の再発見や基礎文献に関する解釈は EMS 大会にとって重要かつ多いトピックである。シェフェールの『音楽オブジェ論』からミシェル・シオン、フランソワ・ドラランドへとつながる音響分類や音響継起の類型化 (連続的、反復的、瞬発的) は、デニス・スモーリーによる再理論化によって英仏の教育機関で広く浸透し、若い研究者たちの共通言語となっている。近年注目されているプリザベーションに関しては、1960 80 年代に制作された作品の散逸した資料の発掘・整理や、制作プロセスを知るための資料比較 (Martha Brech, Filipa amagalhaes) が目立った。美学、音素材、音色・ピッチの相関、ノーターションなど視点から分析対象としていくつかの発表で共通して取り上げられた作品として、John Chowning « Stria » (1977)、Barry Truax « Riverrun » (1986)、Philippe Manoury « Pluto » (1988)、Francis Dhomont « Novars » (1989)、Trevor Wishart « Imago » (2002) などがある。

## 水野 みか子 (Mikako MIZUNO)

作曲、音楽学、芸術工学の分野で活動。名古屋市立大学大学院芸術工学研究科長。近年の作品は、ISEA、ISCM、アルバ国際音楽祭、ヴェネチア国際音楽祭、北京 Musicacoustica、ICMC など上演されている。08 愛知県芸術文化選奨。08 年より EMS 国際大会で連続的に電子音響音楽の研究成果を発表。2011 2013 年には、北京、カルガリー、名古屋、東京を高速音響送受信システムで結ぶネットワークコンサートを実現。2016 年 10 月の ACMP コンサートにて、ヴァイオリニスト木村まり氏のための『Andata e ritorno del flusso luminoso (ゆき交う光束)』を発表。この作品はイタリアの詩人ルイジ・チェラントラ氏と俳人馬場駿吉氏の文芸交流に基

づいている。2016 年 4~6 月パリ・ソルボンヌ大学招聘 研究員。電子音響音楽国際研究大会 EMS2017 Nagoya 実行委員長。2018 年 3 月ソルボンヌ大学博士論文外部 審査員。



この作品は、クリエイティブ・コモンズの表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには、<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> をご覧ください、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。